
非日常的な日常の中の非日常

D－Dream

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

非日常的な日常の中の非日常

【Nコード】

N2964Y

【作者名】

D－Dream

【あらすじ】

いつも通りの生活をしていたMr. KKとジャックの話。掃除屋と暗殺者で会話させたかっただけの、つたないファンフィクション。Pixivにもあげてます。

銃声。

マガジンを落とす音が響いて、静寂が訪れた。

「いったい、いつまで続けるつもりなんだ？」

静寂を破ったのは、俺の背後の人影に対しての質問だった。

「いつまでも。Mr. KK。お前、見てておもしろい」

現れた追跡者は、白髪が覗くものの、ガスマスクとゴーグルによって顔が隠されている。それに普通ではめだつてしょうがない服装をしている。

あからさまな不審者に俺は身構えた。

「身構えなくてもいい。今は俺、任務ない」

「任務ってなんだよ」

俺自身の任務の直後は、正直誰とも話したくなくてぶっきりぼうになってしまう。

「俺とお前、同業者？ ん、どうきようしゃ？」

「……お前も、殺し屋してるのか？」

目の前の不審者はガスマスクとゴーグルをはずすと、ニヤリと笑った。……どうやら、そういうことらしい。

幼さの残る顔立ちをしている。

次の言葉を出そうとした時、銃声を聞きつけたのか、足音が近づ

いてきた。

「見つかると、不都合。お互いに」

そういうと少年は軽い身のこなしで、屋根に飛び乗り、さっそうと去っていった。

「あ、待てっ！ チツ、人が……」

さっきの少年のようにいかない俺は、路地の奥へと走った。しばらく走って、見つからないだろうと思われる辺りまで来た。ため息をつき、タバコに火をつけようとポケットをあさった。タバコ自体はでてきたが、肝心のライターがでてこない。ふと、タバコを持った手に暖かさを感じ、目をやった。

「また会ったな」

目の前には、さきの少年がいた。気のせいでなければ、ガスマスクから火がでている。

「お前……」

「聞きたいこと、あるだろ」

少年が真剣な目で見つめてくる。赤い目だ。

「声、聞こえた。なんだ。何が聞きたい？」

呼び止められたからって、会いにくる殺し屋なんかいるか、普通。そう思いながら、俺は口を開いた。

「お前、名前は？」

「ジャック」

「いくつだ？」

「わからない」

ジャックは淡々と、俺の質問に答えた。面白みがない以前に、殺し屋にしては簡単に答えすぎだろう。

「じゃあ……。任務ってのを始めてしたのは、どれくらい前なんだ？」

「2557日前だ。お前が聞きたかったのは、そういうことだけか？」

ジャックは、そう言うのと立ち上がった。ヘッドホンに手を当てて、何かを真剣に聞いている。

「今、任務が届いた。俺、行かないといけない」

ジャックはきびすをかえすと、言い忘れていたことがあったのか立ち止まった。

「そのうち、また会える。お前のおい、覚えた」

ジャックはさっきと同じようにすばやい動きで、去っていった。

「なんだったんだ、あいつ」

紫煙が宙に揺らめいた。

幼さが残る殺し屋の姿が脳裏に残っている。

「……俺は、なんでこの仕事を続けてるんだろう……」

“掃除屋”の称号をもらったから、やめられなくなったのか？
俺は帽子を深くかぶりなおした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2964y/>

非日常的な日常の中の非日常

2011年11月12日22時30分発行